

文化産業研究～音楽関連産業群を事例に

文化と政治と経済について

権力への服従から市場への服従へ

→ミロシュ・フォアマン監督（1985）『アマデウス』ワーナー・ブラザーズ／松竹富士

- ▶ 宮廷作曲家アントニオ・サリエリと天才作曲家ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
 - ▶ サリエリ
 - ▶ 宮廷音楽家（オーストリア皇帝の庇護のもと、皇帝の求める音楽を作り、皇帝から報酬をもらう）
 - ▶ 上司の言いなり・主体性がない（？）
 - ▶ モーツァルト
 - ▶ フリーランス音楽家（皇帝や教会の決まりごとからは自律した音楽的な美しさを追求。演奏会の入場料で生計を立てる）
 - ▶ 今でいうフリーターの元祖（？）

供犠としての音楽（政治としての音楽）

- ▶ 音のない世界＝空気のない世界＝死の世界
- ▶ 権力（宗教）は、音を組織して音楽とすることで、人びとをまとめ上げ、社会として秩序を与える
- ▶ 音楽は、生と秩序をつかさどる「神」への捧げ物
 - ▶ 「神」が逆鱗すれば、社会秩序は破綻し、死が訪れ、静寂が残る

演奏としての音楽（経済としての音楽）

- ▶ 「神」に代わって秩序の頂点にたつ人間（王、皇帝、天皇……）とは別の人間が、芸術としての音楽に出資するようになり、秩序維持とは直接結びつかない音楽家・音楽作品が登場する
- ▶ 18世紀末：フランス革命、ロマン主義……
 - ▶ 市民階級（ブルジョワ階級）の台頭と、彼らを顧客とする演奏会の成立
- ▶ 音楽はこれ以降、権力からは自由になったが、市場競争のなかに否応なしに取り込まれてゆくことになる
 - ▶ 音楽生産の産業化と著作権制度の整備

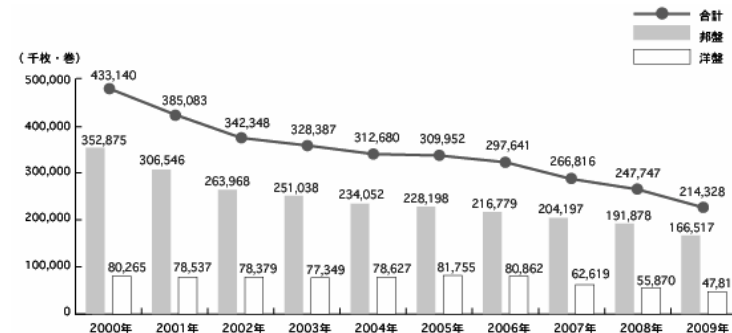
音楽産業の誕生

著作権の歴史

- ▶ 1709年：英国で最初の体系的な著作権法が成立（アン女王の法律）→海賊出版対策。
- ▶ 18世紀末：フランスを中心に、作者の人格尊重を基礎とする著作権法が制定
 - ▶ 1851年に仏SACEM（音楽著作権者作曲者出版者協会）が設立され、音楽作品にも著作権が認められる
- ▶ 19世紀：著作権法制度の国際化→ベルヌ条約（1886年）
 - ▶ 日本は1899年という比較的早い時期に批准・加盟した→欧米との不平等条約改正のため
 - ▶ 2010年4月時点での加盟国は164カ国

レコード産業

- ▶ 19世紀末：音の録音・再生技術が普及することで、音楽は物質性を与えられ、商品として流通するようになる
 - ▶ 原盤を使い、ひとつの演奏を大量の円盤に複製し、販売することが可能に
- ▶ 20世紀末：デジタル録音・再生・流通技術が普及することで、音楽の物質性・商品性はもはや自明ではなくなっている（のか？）



オーディオレコード生産枚数の変遷（日本レコード協会）

文化産業とはなにか？

工場で文化は生まれるのだろうか？

- ▶ 文化の大量生産
 - ▶ 書籍やレコード、映画、ポスター、洋服等、私たちの生活を有意義なものにするきっかけとなるものが、工場で石鹸や歯磨き粉のように大量生産されている
- ▶ 作品はモノとしてパッケージ化され、商品として流通し、特定の価格をつけられて取引される

石鹸と音楽の違い

- ▶ 石鹸の経済学
 - ▶ どれだけ売れても、石鹸一つあたりのコストは一定
 - ▶ 機能（汚れがどれだけ良く落ちるか）に応じて価値が決まる
 - ▶ 一人当たりの必要量がほぼ確定出来る
- ▶ 音楽の経済学
 - ▶ 売れば売れるほど、CD一枚あたりのコストは安くなる
 - ▶ 機能（演奏機器に装填してプレイボタンを押すと音が出る）とは関係のないところで価値が決まる
 - ▶ 一人当たりの必要量が確定出来ない



1930年代のレコードプレス工場 ©2006Vinyl Factory

情報財の特徴

- ▶ お布施の理論（⇒梅棹忠夫）
 - ▶ 読経というサービスに対して支払われる対価（お布施の金額）は、お経を読む坊さんの格とお布施を支払う檀家の格により決まる。情報財の価値も、これとほぼ同じ仕組みで決まる
 - ▶ 新譜レコードの価格はほぼ一定だが、中古レコードの値段はまちまちで、場合によっては持ち込んでも買ってくれない（もらってもくれない）レコードもある。
- ▶ 消費者はなににお金を払っているのか？
 - ▶ 大衆文化研究の領域ではとても重要な問題意識の一つ

文化産業への視座

企業操作説

資本家による利益追求と大衆操作（⇒T.W.アドルノ）

- ▶ ポピュラー音楽は、石鹸や歯磨き粉と全く同じような方法で、合理化された組織的な手順を経て、金儲けを唯一の目的として生産・配給されている。
- ▶ 規格化：交換可能な部品に分解され、大量生産される音楽
 - ▶ ミュージシャンは、覚えやすい同じような旋律や歌詞の楽曲を作るよう資本家により仕向けられている
- ▶ 似非個性：大衆に見せかけの悦楽を与え、単純作業に順応しやすくする
 - ▶ 文化産業は、このようにして規格化された楽曲を、あたかも高い独創性を持ったものとして大量に売りさばっている

反論

- ▶ 既存の作品や様式を引用していない作品はないんじゃない？
- ▶ 大衆音楽って、そもそも反復をこそ特長とするんじゃないの？

能動的リスナー説

複製技術による大衆芸術の可能性 (⇒W.ベンヤミン)

- ▶ アウラの消失：オリジナルの唯一性が消え、複製された作品は大衆のものに
 - ▶ 芸術作品との対面を規定していた因習的・階級的価値観が、複製技術により破綻する
- ▶ 気散じとしての芸術鑑賞
 - ▶ 作品の作り手の意図に左右されない意味付け=気の散った芸術鑑賞者（つまり大衆）
- ▶ 作品の流用と二次創作
 - ▶ インターネットの普及により特に顕著化している

反論

- ▶ 大衆が芸術作品の複製を購入したら誰が儲かるの？
- ▶ 作り手の意図はここまで軽視されてしまっているのだろうか？

選択フロー説

ベルトコンベアー (⇒Paul M. Hirsch)

- ▶ 情報財の市場は潜在的に混沌としている（なにか売れるは楽曲を発表するまで分からない）ので、リスク管理のための秩序付けとして、ミュージシャンからリスナーに至る各段階に様々な門番（ゲートキーパー）を設け、事前選択を行う
 - ▶ ミュージシャン（原材料）の選別（スカウト、オーディションなど……）
 - ▶ クリエイティブ下位システムでの選別（プロデューサー、レーベル経営者など……）
 - ▶ レーベルのビジネス部門
 - ▶ 各地のプロモーターやメディア
 - ▶ 一般リスナー

反論

- ▶ 音楽生産とは、ミュージシャンからリスナーに至る一方通行かつ機械的な作業なのだろうか？
- ▶ 作品の意味や価値についての議論がいつの間にか抜け落ちてしまっている

文化仲介者としての音楽産業

リスナー（のイメージ）を制作現場に引き込む (⇒A. エニョン)

- ▶ ミュージシャンとリスナーを結びつけ、またその間を埋めてゆくような構造として音楽産業を捉える
 - ▶ 楽曲の制作プロセスには、固定された論理的・時間的順序というのが存在しない
 - ▶ ポピュラー音楽の制作プロセスに関与するすべての人間が、実際のリスナーとのやりとりから得たイメージを凝縮した、理念型としてのリスナーを、元のリスナーの方へ再び投影している
 - ▶ 経済的次元のみならず、文化的次元でもリスナーの存在が作り手側の戦略に影響を与える

文化仲介者という人物 (⇒K. ニーガス)

- ▶ ポピュラー音楽の生産活動に従事すると同時に、メディアやそのコンテンツを通してそれらを再編し、配給し、リスナーに向けて媒介する
 - ▶ 文化仲介者とは、社会的生活をおくる人間であり、彼ら自身様々な価値観や好き嫌いを持って活動している

差異化ネットワークとしての音楽関連産業群

複数形の音楽関連産業群

レコード産業以外の、音楽に関連する業界

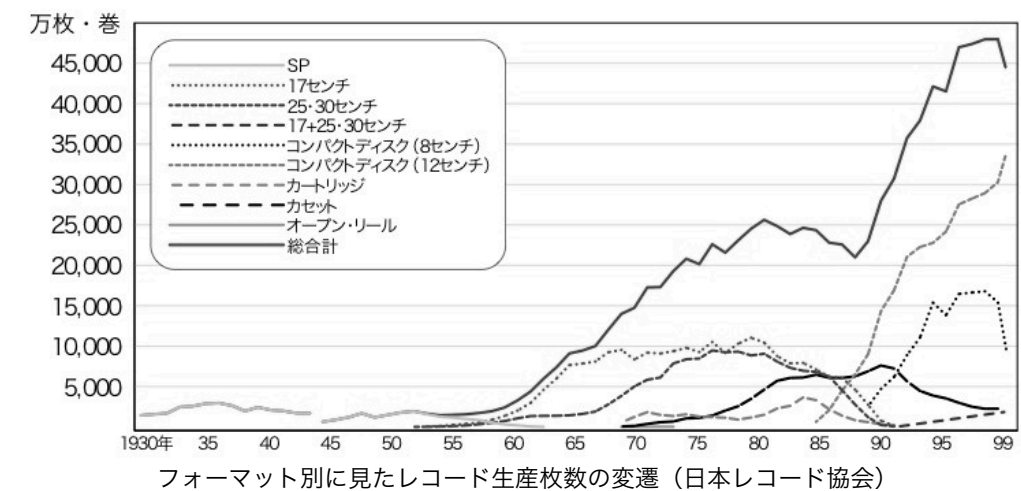
- ▶ 情報通信・放送業界
 - ▶ 電波メディア：ラジオ、地上波テレビ、ケーブルテレビ、衛星テレビ……
 - ▶ 活字メディア：書籍、情報誌、音楽誌、フリーペーパー、フライヤー……
 - ▶ インターネット：アーティストサイト、ファンサイト、電子配信……
 - ▶ 移動体通信：着メロ、着うた……
- ▶ 流通業界：レコード小売店、中古レコード屋……

- ▶ イベント業界：コンサート、フェスティバル、ライブハウス、クラブ……
- ▶ 家電業界：メーカー、小売店……
- ▶ 楽器業界：メーカー、小売店、練習・録音スタジオ……
- ▶ 教育機関：音大・芸大、専門学校、カルチャースクール……
- ▶ ……

差異化戦略と音楽生産のネットワーク化

- ▶ それぞれの業界の中では、様々な企業や組織が常に競合関係に置かれている
- ▶ 文化仲介者は、特にジャンルを目印にして、業界の垣根を超えるように結びつき、意味生産と価値連鎖のネットワークを作り、ミュージシャンとリスナーのあいだを媒介してゆく
 - ▶ 大規模なCMタイアップ戦略を背景にした売れ線J-Pop（教科書p.74）
 - ▶ →メジャーレーベル・地上波テレビ・FM全国ネット・大型レコード店・着うたフル・iTunes・総合誌・コンサートホール……
 - ▶ インディーレーベルから1000枚リリースされたハードコアラップ（教科書pp.71-2）
 - ▶ →インディーレーベル・コミュニティFM・アナログレコード店・フライヤー・クラブ

音楽関連技術の変遷と音楽関連産業群の生成・変形



- ▶ 音楽を録音・再生する技術の変遷も、音楽の媒介ネットワークの構成に強い影響を及ぼしてきた
 - ▶ グループサウンズ：カラーテレビ放送とEP盤
 - ▶ フォーク/ロック：深夜ラジオとLP盤
 - ▶ 演歌：カセットテープ（ドライブインカルチャー）
 - ▶ ダンス：12インチ盤（クラブカルチャー）

参考文献（興味のある人は……）

テオドール・アドルノ & マックス・ホルクハイマー（1947=2007）『啓蒙の弁証法』岩波文庫

ジャック・アタリ（1977=2006）『ノイズ～音楽/貨幣/雑音』みすず書房

ヴァルター・ベンヤミン（1935=1999）『複製技術時代の芸術』晶文社

アントワヌ・エニョン（1983=1990）「成功の生産～ポップ曲の反音楽学」三井徹・編訳『ポピュラー音楽の研究』音楽之友社

Hirsch, P. M. (1972=1990) "Processing Fads and Fashions: An Organization-Set Analysis of Cultural Industry Systems" in S. Frith & A. Goodwin (eds.) *On Record: Rock, Pop and the Written Word*. London: Routledge.

キース・ニーガス（2004）『ポピュラー音楽理論入門』水声社

日本レコード協会（RIAJ）http://www.riaj.or.jp/data/aud_rec/aud_q.html（2010年5月16日アクセス）

世界知的所有権機関（WIPO）http://www.wipo.int/treaties/en/ShowResults.jsp?lang=en&treaty_id=15（2010年5月16日アクセス）

梅棹忠夫（1999）『情報の文明学』中公文庫